

---

# 親父のくせに

佐野隆之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

親父のくせに

### 【コード】

N8306W

### 【作者名】

佐野隆之

### 【あらすじ】

舞台は西暦2059年の名古屋。主人公の轟シンは大学受験を控えていた。シンの父、陽光ひかりはヘビィ・ワーカー（四足ロボット重機の俗称）の操縦士でかなりの腕前であったが、酒と女が大好きな破天荒な性格だった。そんな陽光はシンに大学なんて行っても時間と金の無駄だと言って認めていなかった。しかしシンは陽光の言葉をまともに聞くことも無く勉強に励んでいた。

ある日、シンは陽光が頻繁に朝帰りをしたり、生活費をまともに出

すことも無く数日間家を空けたりといった親としての無責任さに腹を立て、家を飛び出す。

## 第1話 疑似家族旅行

『どうしてお袋は俺を産んだんだ？』

『どうしてお袋は俺を置いて親父に？』

『どうして俺が親父の世話してるんだ？』

『だから俺は生かされてるのか？』

なんて事を最近考えるようになった。もし、こんな自問自答をしている俺を笑いたかつたら笑ってくれて大歓迎だ。自分でも笑えるから、ホント……。

でも、そんなこと考えた事無い奴なんているのか？

あ、思い出した。いるよ。親父だ。親父がそんな事を考える人間だったら俺はもつと目に見える世界が明るく見えて来れたんじゃないか？ そうつくづく思うこの頃だ

轟<sup>とんが</sup>シン<sup>しん</sup>17才の心には彼固有の思考がくどくこびりついていて、

もしこれを聞くことができたり、見ることが出来たりしてしまう邪魔な能力が人々にあつたとしたら飽き飽きするほどの論争が起きるかも知れない。もしくは人々がどれほど他人に対して思いの外無関心であることが露呈するのではないだろうか。

西暦2046年8月13日、轟<sup>とんが</sup>シン<sup>しん</sup>五歳の誕生日。曖昧さが雑じりつつも忘れられないシンの記憶。

この時、シンの父、陽光<sup>やうこう</sup>は三十六歳。母、真珠<sup>まなこ</sup>は二十八歳。この三人の家族は名古屋からリニア新幹線に乗り東京へと向かっていた。

リニア新幹線“みらい”の小振りな窓へ張り付きようにして外を眺めているシン。その目は見事などんぐり眼<sup>まなこ</sup>で無邪気さと純真さを持つ子供そのものであった。そのシンに覆い被さるようにして外を眺める陽光は特徴的な低いしゃがれ声で演説でもしているかのよう

な大声で言った。

「丁度俺が高校の時にこいつが出来てよお、修学旅行で東京まで行ったっけなあー！」

陽光の大声に訝いぶかしげな表情を露骨に作る真珠。そして窓の外の景色は勿論のこと自分の息子の無邪気で愛らしい姿にも興味の片鱗を見せることなく溜め息を出し、腕組をしたままレインドロップスタイルの茶色いサングラスの中の目は閉じていた。

ワクワク感一杯だったこの時のシンには自分がお母さんと呼んでいたこの人物の内的感情は知る訳も無い。だから無邪気な子供であり、子供は無邪気なのである。しかし無邪気さとは裏腹と言える、自分の『お父さんとお母さんの仲は良くない』『タロウくんやミキちゃんのところとは違うんだ』ということは確実に理解し、それを口にするのは子供として不利な立場になることを感覚的に悟っていた。それがこの頃のシンであった。

そのシンはハンドルを握って車を運転する動作をしながら陽気に歌っている。

「リニア・モーターカー リニア・モーターカー」

それを聞いた陽光はニッコリ満面の笑顔で言う。

「お、懐かしいCMソングだがや。平成おばさんアイドル3人組でやってたやつだろ？」

「もう、大きな声出さないでよ。だいたい、なんであんた朝から酒臭いのよ？」

父と子のやりとりに容赦なく無常な言葉差し込む真珠。真珠の呆れ顔はサングラスの中だ。それに対し陽光は真珠の横顔へ言う。

「これから遊びに行く時にそんなキンキンカリカリ声でつまんねえ事言うんじゃねえよ。つまんねえ女だなあ」

車両内に響くほどの声で諭す陽光であるが酒臭いのは事実であったし、非常識と周りからも非難される態度でもあった。しかしまたそれに対し「あなたの常識が欠けるからよ」と真珠が言えば「常識があつたら俺はここにいねえつつうーの」と返す陽光。売り言

葉に買い言葉。その予想通りの返事と自分自身の対応に真珠は可笑しくなり「ふ……そうね」とだけ言ってシヨルダーバッグからイヤホンを取り出し外界を遮断した。

真夏の突き刺す光が眩しい快晴の元、リニア新幹線“みらい”の窓からは軽快に流れていく風景が映し出されている。それは人々の群れが生活する街から町へと続き、次第に人々の腹を満たすものが生まれる田畑へと変化していく。そして人をも寄せ付けないような神々しい山々へと。それらの風景は5才のシンには大海そのものような広大な新世界、別世界に映ってみえた。

その中でもシンを釘付けにさせ心打つほどの景色は、シンの目いっぱいに入った富士山だった。

「うわあ、でっかい山！ きれい！」

シンと同様にその景色を見て感動した陽光も思わず声が出る。もちろんイヤホンで音楽を聴いていた真珠にまで聞こえる音量でだ。

「おおー、ひっさしぶりに見るフジヤマだぜえ。いいねえー。なあ、シン。男はよお、どんな時でもああいう風に、デーんと構えてなきやいけないんだぞ」

そう言って陽光はシンの小さな肩を優しく掴むとカクカクと揺らした。シンは少し頭がクラツとして一瞬止めて欲しいという気持ちで沸いたものの、肩から伝わってくる父親の熱さが“これは我慢しなくちゃ”と無意識に思った。

「あ、またトンネル……」

二人の目の前は暗くなり、父と子の間を繋いでいた富士山が目の前から消えた。

しかし数秒も経たずに再び二人の前に富士山が現れた。シンの目には実物その物を見ている事にしか思えないその景色は衛星映像を元に作られたCG映像である。

「リニアは景色が楽しめねえから、つまんねえなあ。やつぱ何でも生の方がいいぜ。なあ、真珠さんよお。別に“のぞみ”ちゃん（新

幹線)でよかつたんじゃねえの？ リニア高えし」

孤立を決め込んでいた真珠へ周りの目など構うこと無く大声で話かける陽光。

「早く着くからリニアの方がいいのよ。それに早く着けばそれだけ長い時間向こうで遊べるでしょ？」と真珠は独り言でも言っているかの様な調子で淡々と渋々応えた。だがその真珠の態度をいちいち気にする陽光ではない。シンから体を離すと自分も真珠のようにリクライニングシートに体を預けて続けた。

「まあ、そりゃそうだけどな。しかし気前がいいなあ、お前の奢りとは」と変わりなく大声で口にする陽光。

「アンタはケチだからそうでもしなくちゃ遠出なんてできないでしょ」

「儉約家と呼んでくれよ」

「全部、女と酒に使って私達のところにはろくに回って来やしないじゃないの」

「何を見たようなこと言いやがって」

淡々と言葉を発していたはずの真珠だが簡単に陽光のペースに乗せられてしまい言葉の汚れ具合と音量が増していた。

こういった自分の状態の悪化の原因はすべて陽光にあり、そして若き日の陽光へ一時の安息のために心と体を委ねてしまった過去の自分をすべてかき消し去りたいという思いだけに真珠の心は満たされてしまっていた。

そのせいでこの空間にいることに息苦しさを感じていた真珠は化粧室の入室ランプが消えるのを確認すると黙ったまま立ち上がり化粧室へと向かった。

「なんだ、しっこか？」

(つつたく……)

陽光の品のない言葉が真珠の耳に掛かかり口を開けかけたがそれに反射することの繰り返し返しが自分の弱さなんだと自分へ言い聞かせた。そして真珠は知的で懐深く能動的に自分を愛してくれるカイル

の元へと向かう事だけを胸に秘めていたのだった。

真珠は化粧室へ入ると今まで汚染された空気を吸い続けていたものを浄化するために大きく三回深呼吸した。そしてシヨルダーバッグから手のひらほどのコンパクトスタイル・スマートフォンを取り出し彼からのボイスメールを確認した。

彼女が東京行きを言い出した理由はここにあった



## 第2話 非家族的食卓

発信日時 2046年8月13日 月曜日 午前8時33分

発信元 Kyle Chandler

『おはよう真珠。君からのメールの予定通りなら今頃はリニアの中かな？ 僕は今起きたところだよ。何だか昨日は落ち着かなくなかなか寝つけ無かったんだ。今夜は食事の後、ひとまず君との暮らしに必要なものを一緒に買いに行こう。真珠の好みはある程度解っているつもりだけれどまだ少し自信が無くてね。ははは。でも目星はつけてあるんだ。じゃあ、今夜。またメールするよ』

イヤホンを通して真珠の耳に響く低くまるやかながらも爽やかさを感じる声。青年という言葉がしっくり来る男。紳士的な振る舞いにもまつたく嫌味がなく自分と同じ年の男とは思えない品格ある男として真珠はカイルを捉えていた。それは陽光との比較によるものも大きいと思うが、それを差し引いても真珠にとっては自分にふさわしい男だと決め付けていた。それはかつて学生時代に男子達から黒真珠とあだ名され持てはやされた若き日のプライドが呼び覚まされているせいかもしれない……

時は移り今から二ヶ月前。久振りに陽光と真珠そしてシンの三人で夕食を家で迎えた時だった。

「シンの誕生日なんだけれど、デイズニートリゾートでしない？」

真珠は柔らかい口調と朗らかな表情で陽光へ問いかけた。明らかに媚びだ。

「藪から棒かい。なんでわざわざそんな遠くてめんどくせえとこまで行く？」

自分の気持ちに寸分気遣うことなく応える陽光の言いぐさに真珠は媚び声と表情を瞬時に吹き飛ばし刺々しく言い放った。

「すぐ何でも『面倒くさい』だわねっ！ ほら、シンは喜んでるじ

やない」

真珠は陽光の隣に座るシンを顎あごで指して言った。そのシンはと言うと、目を丸くしてぽっかり口を開けて真珠と陽光の顔を代わる代わる見ている。

シンを見て陽光は「この顔は意味不明の顔だろ」と言っつてバカ笑いした。その陽光の態度に真珠は顔をしかめるも陽光の見方もあながちではないと思いつくさま自分の提案に同意させるためにシンを見やっつた。

シンの気持ちはというと真珠の意に反することであるつが陽光の言っつたことの方に近く、その時のシンの心内こころうちは「デイズニールゾート？ めんどつくさい？」であつた。

「デイズニールゾートつてナニ？」

シンは真珠に聞いた。が、真珠が口を開く前に陽光の言葉が入つた。

「だろ？ 女じゃねえんだからあんなチャラついた所に興味ねえんだよ」

「あなたがちつとも遊びに連れて行つてあげないから知らないのよ」「何言つてんだ。そういうお遊戯関係はお前の仕事だろ。俺は運んでくるもん運んでんだからいちいちグチグチ言うんじゃねえよ、田分たぶんけ。だいたいそんなもんだつたらわざわざ東京まで行かなくてもナガシマでいいじゃねえか。俺が車出してやるよ」

大人の男と女の醜い言い争いを聞かされているシンだが、この会話の中から自分に必要な情報だけを聞き分け推理すると飛び出す様な勢いで声をあげた。

「ゆうえんち！？」

シンは以前、真珠に連れられて真珠の友人数人と一度ナガシマスパールランドへ行つた記憶が残つていたからそう推理したのだ。しかしこの時は太平洋と濃尾平野が一望できる大観覧車に乗つただけであとは手を引つ張られて大人の壁の迷路を連れ回された記憶しかない。真珠達はアウトレットモールでのショッピングの方に夢中だつ

たからだ。今度は遊園地内で目にした見たこともない恐ろしく大きくて動いて回る乗り物や他の子達が乗っていた自分で動かせるクルマに乗れるんじゃないかという期待感が無意識にシンの気持ちを興奮させた。

「お、ほれ。シンもナガシマが良いってよ」

シンの反応に弾むように言った陽光。それを無視してシンの説得に励むは真珠。

「シン、デイズニーリゾートはね、もーっと広くて今まで見たことないものがいっぱいあるのよ。ミッキーマウスや白雪姫もいるし」

真珠はシンにグツと近づいてオーバーアクションまで付けて言う  
とシンはその言葉に「ホント!？」と笑顔で聞き返した。シンは自分の想像が実現するかと思うと一層ワクワクした。

「ナガシマで十分だがや。ナガシマにはアンパンマンがいるぜ、シン。それに天然温泉があるしよお。お、そうだよ。温泉があるじゃねえか。温泉でのんびりっていうのも悪くないんじゃないの？ 家族風呂でゆっくりっていうのはどうだい？ 真珠さん。ひっそしぶりに？ シンがデカくなるともうできねえだろ？」

相手の気持ちや周囲の状況など考えた事もない男。むしろ相手を挑発して楽しんでいるかのような喋りっぷりをして自分を苛立たせる男。真珠は夫と呼ぶには恥ずかしいこの男とまともな会話を最近した覚えがない。抱き合うなどもっての外だ。陽光の話に聞く耳を持たずにシンへと話し続ける。

「リニア新幹線にも乗れるのよ？」

「リニア・モーターカー!？」

「そう、シンの大好きなリニア・モーターカー」

「リニアって、オマエ、俺にそんな金ねえぞ」

「この子の前でそういうの止めてもらえる？ いいわよ、私が払うから」

「なんだ、そんな余裕があるんだったら来月分の生活費は無しってことで頼むわ。ちょっとこここのところ余裕無くてなあ」

陽光の無責任でだらしない物言いに真珠はキレた。

「何言ってるのよっ！ とにかくこの子の前でそういうことを言わないでくれる？」

“家族の食卓”という空間を見事な金切り声で切り裂いた。その瞬間、シンは肩をすぼめ耳を手の平で塞いだ。陽光もシンと同じ動作をした。シンの方は目をしっかりと閉じている。そしてシンと陽光の二人は耳を塞いだまま顔を向け合い目を合わせると二人揃ってニヤリとした。

真珠は二人の動作の意味など気にかけることもなく、すでにシンの前でキレた自分をどこかへ捨てた状態でシンへ選択を迫った。

「シンはどっちがいい？」

「リニア・モーターカー」

シンは即答した。

「リニア見るくらい金城ふ頭の鉄道館で良いがや。俺もガキのころ親父に連れられてそっぴい行ったわ。面白れえぞ。よしっ今度連れっつてやる」

陽光は陽光でシンを自分側につけようと躍起だ。

「いつ？」

シンは自分の父親は約束しても守らないことを無意識でよく理解していた。だから反射的に確約のために日時を決めるよう陽光に迫った。

息子に見透かされていることを知らない陽光はズボンのポケットからスマートフォンを抜き出し予定表を見て応える。

「うーん、来週の日曜の午後はどうよ？」

それに対して「ホント？」としっかり確認をとるのが当然のシン。それに対して「また連絡するわ」と曖昧なまま締めるのが当然の

陽光。

それに対して「本当に実現するのかしら」と嫌味たっぷり真珠は言った。

そして結果は真珠の思った通りで、シンとの約束はリニア新幹線の玩具おもちゃで誤魔化し、東京行きには賛同してついて来た。

(現金な男…… 言動も行動も安易に読める陳腐な男……)

真珠の思惑通りに事が運び、自分の身を轟家から抜け出す準備はこつとして整った。

この時の記憶を元に思考するシン

親父とお袋の会話。いつも罵りあい。明るい家庭。明るい食卓。笑顔のある風景。家族三人揃っている時間はわずか一、二時間程度のことなのに……

夫婦円満、家庭円満。父親と母親の間で子供の手を取って歩いている姿を見て不思議だった。

俺にとって家族という括りが未だに理解できずにいる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8306w/>

---

親父のくせに

2011年10月3日03時28分発行